

2011年 平泉の世界遺産登録は可能か？！



柳の御所は日本の「エルベ溪谷」？！

柳の御所跡から東に東稲山を望むと平泉バイパスの
のり面と数珠つなぎに流れる自動車が見える。
これが世界遺産のコアゾーンではあり得ない。
(2009年3月20日佐藤弘弥撮影)

緒言 平泉を取り巻く状況は何も変わっていない

09年4月4日(土)、文化庁で開催された「平泉の文化遺産」推薦書作成委員会(委員長:工藤雅樹福島大名誉教授)で、ついに、平泉の9つの構成資産のうち4つが外される方針が示された。

結論から言えば、奥州市の衣川地区にある「長者原廃寺跡」と「白鳥館遺跡」。一関市の「骨寺村荘園遺跡」。平泉町の「達谷窟」。以上の4つの構成資産が外されることになった。これは文化庁にとって、昨年7月カナダのケベック市で開催されたイコモスからの厳しい指摘により「登録延期」となったことを受けて、2011年度に、登録を受けるための、ギリギリのタイミングでの苦渋の決断だった。

今回の推薦書委員会の決定は、正式なものではない。文化庁は、これまで9つの構成資

産を登録することを、「登録延期」決定直後に明言した経緯があり、構成資産の登録を外されることが決まった奥州市や一関市との協議が残されており、相当の波乱が予想される。

文化庁としては、2月にイコモスから招請した中国とカナダの専門家の意見を聞いたことで、構成資産の圧縮は、やむを得ないと言いたげだが、やはり勢いで登録延期決定直後に語った「9つの構成資産を変えない」とした発言のツケは大きい。

ところで残った5つの構成資産においても、問題がないわけではない。中尊寺、毛越寺は、問題ないにしろ、「浄土思想」（浄土思想を基調とする文化的景観）から「浄土世界」（日本の仏教思想に基づき現世に完成した浄土世界）とコンセプトが変わった中で、その軸線としての「金鶏山」と「無量光院」のふたつの構成資産には、大いに問題がある。

ズバリ指摘すれば、金鶏山の麓には、鉄塔立ち、さらにその南西には温泉地として造営された塔山地区が、開発によって変貌を遂げている。「無量光院」には、その遺跡を掠めるように東北線の線路が走っている。この浄土を観想するはずの金鶏山（須弥山のイメージ）と無量光院の軸線の間には、さらに4号線が走っている。つまりこのふたつの構成資産を繋ぐ空間には、あまりに多くの障害物が横たわり過ぎている。やはり、イコモスを説得する方法としては、この軸線周辺の景観をどのように修景するかという将来に向けた具体的保全計画を添付することが必要だと思われる。そして最大の問題は、平泉の政庁としての「柳の御所跡（平泉館）」である。やはり、今回の会議でも、その内容については、2月のイコモス国際委員の意見を受けて、柳の御所跡に関しては、「残すことが可能」という玉虫色のニュアンスである。

朝日新聞岩手県内版では、その辺りを踏まえて、このような記事になっている。

『構成資産として残ることが確実なのは中尊寺、毛越寺、無量光院跡、金鶏山の四つ。柳之御所遺跡は「含めることが可能」と結論づけた。』（4月5日朝刊）

また同日の毎日新聞岩手県内版は、次のように報じた。

『構成資産の選択について▽中尊寺▽毛越寺・観自在王院▽無量光院跡▽金鶏山は「確実」、柳之御所は「都市造営の核として十分に可能」との判断が示された。中尊寺経蔵と不可分の骨寺村荘園遺跡を巡っては、一部委員が除外に反対したものの、調査研究を続け、構成資産の拡張を目指すことで理解を得た。』（4月5日朝刊）

この4つの「確実」とひとつの（柳の御所）「可能」との差は、極めて大きいと言わねばならない・・・。

結論 更なる絞り込みは不可避か

以上を踏まえて、私見を述べさせていただければ、4月4日の推薦書委員会の決定を読みながら、絞り込みの方向が示されたとは言え、全ての状況において、前途多難な状況に変わりはない。厳しく言えば、もっと削減すべきではないかとさえ思われる。イコモスの再審査を前に、全てにおいて曖昧さを残してはならないのである。

昨年7月の登録延期という平泉ショックから、何か変わったことがあるのか。確かにキーコンセプトが「浄土思想」から「浄土世界」に変わった。だが、義経が命を落とし、芭蕉

が感嘆した平泉の文化景観そのものを否定するとき「平泉バイパス」という巨大な公共事業の傷跡が「柳の御所跡」の真ん前に横たわっている。この視覚的な醜悪さに目をつぶって、これも世界遺産のコアゾーンなどと見てくれるはずはないのだ。

いや、イコモスの専門家でなくとも、たまたまあの景観を見た観光客に、こう尋ねてみれば良い。

「この場所が世界遺産の中心に見えますか？」と。

この醜悪な姿を見た時、誰がこの地域が「世界遺産」であると思うだろうか。敢えて言えば、平泉バイパスは、ドイツの世界遺産ドレスデンのエルベ渓谷に橋脚を架ける行為と極似している。あの時、世界遺産委員会は、「もしもここに橋を架けるならば世界遺産から外す」（2006年危機遺産リスト入り）と厳しい勧告をした。いわんや世界遺産にもなっていない「登録延期」の平泉となれば、致命的な結果を招きかねない。地元や推薦書委員の歴史家たちの「平泉の政庁である柳の御所遺跡を外すわけにはいかない」という気持ちは十二分に理解しているが、推薦書において、もしもこの遺跡をコアゾーンとしたならば、その真性性と完全性の証明はどうか。証明不可能なものは、取り除く勇気と決断が肝心ではないか。

また金鶏山周辺の開発にストップをかけられぬ不細工な景色を見て、誰がこれを世界遺産と思うだろう。無量光院周辺のはぎ取られたように群生する草むらを歩いて、誰がここに宇治の平等院をしのぐスケールの御堂が立っていたと思うだろう。線路の脇にある桜は天狗巣病で瀕死なのを知っている関係者はいったい何人いるのか。

今こそ、平泉は、2011年の登録を目指し、大きな政策の転換と修景への具体的な保全計画を策定しなければならない。そしてその保全のタイムスケジュールを具体的に推薦書に書かなければ、2011年再び、悪夢が再現されないとは誰も言い切れない。

（09年4月5日 佐藤弘弥記）